

# 西真寺通信

令和五年夏号 発行 西真寺

## ●「最後の学び直し」とご縁

昨年同様、当山を会所とする、村上門徒会同朋の会主催の「聞法会」をこの六月から十月までの計五回行います。内容については、本山の門徒連続研修会の課題を取り上げます。

今回の「西真寺通信」の内容でもある「葬儀や法事は何のためにやるのですか」から「わたしにとつて幸せとは何でしょうか」や「老いて亡くなるのがわかっていても、受け入れられません」、「環境・臓器移植・格差などの社会問題は、宗教が入り込む問題ではないと思いますか」等、現代社会に潜む課題を対象に予定していますので是非御聴聞下さい。

現在も「西真寺通信」で連載している「私は神さまも信じていますが、それではいけないのですか」は、昨年の聞法会で説明させて頂きました。コロナ禍において、光濟寺様の門徒さん中心に聴聞して頂いたことは、私の「学び直し」の機縁となりました。

課題に対し、パワーポイントを使い図で説明したり、生活に即した内容まで深掘りしながら何とか最後までやり遂げることが出来ました。一回の聞法会を開催するには、かなりの労力と時間が掛かる為、今年からは別の御寺院にお願いするつもりでしたが、今年も引き続きの依頼を断ることが出来ずに当山決定に至りました。

毎回伝えることの難しさに苦悩

し、試行錯誤している中で、光濟寺様のご門徒さんを通して、故安富先生からの問いを常に感じていました。この故安富先生の影響力の残る会の重圧を抱えながら、赴くままに安富先生の出身校である大学に今年から編入することを決めました。

実際は、人工呼吸器を付けられた状態で亡くなった実父にまつわる長年に渡る疑問に対し、生命倫理学の研究を求め、その領域の第一人者の教授から学べる大学が偶然にも故安富先生の出身大学であったからです。

私自身、修士を含めれば四つ目の学位を目指す原動力の背景には、私に求道精神を植え付けたケネス田中先生の影響があります。また、受験に挑む次男やイギリス留学を決めた長男、本願寺派僧侶を目指す坊守という周辺の「学ぶ姿勢」による影響もありました。しかし、もう一つ

この「小手指」は、十年前に癌で亡くなった私の親友の実家がありました。学生時代には毎週泊まりに行つてテニスをし、将来の夢を互いに語り明かした思い出の地であり、四十年ぶりに訪れました。その当時に大学キャンパスは無かったのですが、それ以外は全く変わらない原風景、村上と同じ茶畑の田園が広がっていました。その頃から茶畑には縁があったようです。

亡き親友、故安富先生、亡き実父に見守られながら、そして「学ぶ姿勢」と原風景が相まって、私の「最後の学び直し」を、「仕合わせ」の縁として、とてもうれしく深く感じております。合掌

「私は神さまも信じていますが、それではいけないのですか」⑫  
・親鸞の神祇不拝から学ぶ戦争

## 5. 人間と神の関係

### 神道と仏教の「人間の神化」

神道の特徴をここで今一度整理しておきます。第一に創唱者がいないこと。第二に原始的かつ民族宗教であること。第三に、英雄像を創ること。第四に社会的権力と融合すること。第五に教義が中心でなく、閉鎖的な儀礼が中心であること。第六に人間を祀るということがあげられます。

それぞれの特徴は、様々な結果を及ぼします。為政者による神は、人種と言語が同一であることを利用し、絶対的な理念を生み、英雄像を美化し、「人間の神化」をする訳です。この条件が揃えば、自らを省みる能力を失うことは必然となります。

この内省の能力こそが仏教との明確な違いになります。

これまでの説明の通り、仏教には「往相」と「還相」の過程があります。「人間の神化」を経て「人間の人間化」に至る過程は、自己の内なる煩悩(影)を認めることで、自己の全体性、つまり偽りのないありのままの私を生きていることがはたらくとして成立しています。この過程こそが、主客を超えた、超証の道筋に他なりません。この愚かな自己を感得することは、自尊心にこだわる人には理解できないかもしれません。

一方、歴史上の強い権力者に自己を投影し、英雄像と同一化する方が愚かです。カミュは「観念のために死ぬ連中にはもううんざりなんです。僕はヒロイズムを信じません。英雄になるのは容易な事だと知っているし、それが人殺しを行う事だとわかったからです」と英雄像の影を認めています。

戦後、経済復興に集中することで戦後処理に背を向けてきた結果、政教一致に対し、私たちは無関心でありました。私たちは、その真実と向き合うことなく、やおるずの神は、中東の神と違い、一神教ではないので、戦争しないという幻想に縛られてきたのです。

もとより兵を持たず、人を殺さずという教義を持つ仏教ですが、教団を維持防衛する為に、国家にすり寄り戦争に加担しました。

仏教は、自己の影を認めさせる「還相」という自己の真実を映し出す「はたらく」を持っているにもかかわらず、その本質を私たちは見失ってきたのです。

ニーチェは「我々はさらに神の影を克服しなければならぬ」と言い残しています。

親鸞が、自ら抱える影をその生涯を通して認めながら生きてきたことを忘れてはならないのです。

## 6. 投影と投影の引き戻し 投影とは

田代俊孝は、神祇について「占相祭祀の術であることは、神祇が自らの我欲の投影であり、迷妄の投影であることを何よりも物語っている」と論じています。この言説は、さきのカミュの英雄像に対する投影や戦争を美化する人間のこころのあり様をうまく説明しています。「投影」には次にあげるような特徴があります。

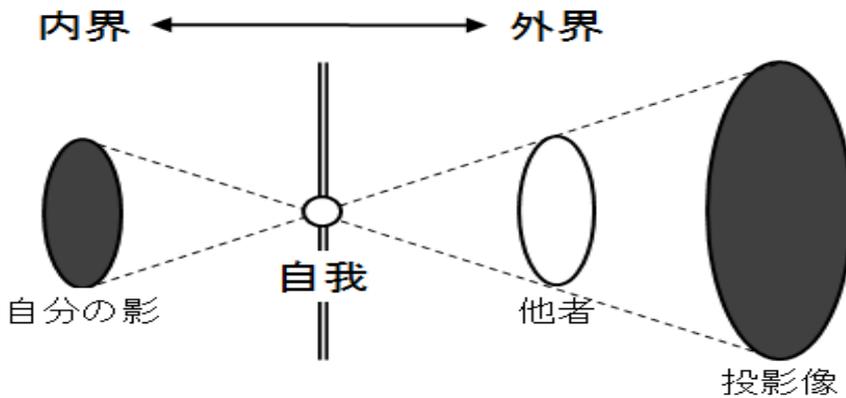
- ① 人間の無意識にある不安からの防衛機制
- ② 人間の未熟さを露呈するはたらく
- ③ 自分の嫌な影の部分を認めない
- ④ 自らの影を他人に引き当て非難する
- ⑤ 自分と向き合うことを避け一時的な安心を得る
- ⑥ 自分を省みない差別的体質を生む
- ⑦ 稚拙さが肥大化する

ユングは、精神疾患者の臨床経験から無意識にある元型の一つに、「神の像」（内なる神）を発見し、この像を他人に投影することで、対象にカリスマ性が起きることを説明しています。これが「人間の神化」という投影の作用です。

私たちの「内なる神」というところの元型が無意識に投影されることから、「神は心の中にあつてはたらく力」になるとしています。こころとは、無意識の諸内容（元型）が人格化したもので、神もまた同様に無意識の内容が人格化したと考えました。それゆえに「神は本質的にこころと同じものである」と論じています。

そして、一度「客体」となる対象（他者）に投影した「内なる神」を「主体」に引き戻すことで、神はこころに入り、真実を知り最高価値は神ではなくなり（象徴となり）、幸福で創造的な状態になると考えました。

この理論はニーチェの「神は死んだ」という課題に心理的な意味を与えています。この作用は、仏教で説明する「還相」であり、「影の意識化」につながることは既に述べています。



この図は内なる影が他人に引き当てられた場合の構造を表していますが、「自分の影」という元型を「内なる神」に置き換えてみれば、その作用に対する理解が深まると思います。

我々は、この「投影」の作用を知らずに、「自我」（図の真ん中）を中心にして、「自我」を頼りにしてものごとを捉えようとしています。迷妄ですが、実際は虚構です。迷妄であり、我欲の投影なのです。自分に無明とはこの状態のことです。

しかしながら、この投影は仏教の「往相」にも当てはまります。ユングが述べたようにこの投影したものを引き戻すこと、つまり「還相」によって本当の真実である自己の影が明らかになります。

内なる神を投影したもの（往相）が「如来」を創造するならば、引き戻した「還相」は、「法蔵菩薩」になります。このことに気づいたのは、曾我量深の次の言説です。

「我らの救主なる法蔵比丘は正しく救はるべき我と一体にして、寧ろ此救はるべく自己を客観に投影する真実究竟の自己の主観である」

「法蔵菩薩」とは、如なる真実浄土の世界からこの現生世界に降りて来た還相回向の菩薩です。ここでは、救われる主体である我と、救う客体である法蔵菩薩との一体が、投影する側の究極の真実を映し出すと説明していました。

人間は、この「主体」から「客体」つまり「凡夫」から「如来」を投影する往相を経て、「客体」から「主体」すなわち「如来」から「法蔵菩薩」という投影の引き戻しによって「主体」が「客体」を超えられる。この「凡夫」と「法蔵菩薩」が一体になり自己に目覚めるという過程が曾我の理論になり、ユングの「幸福で創造的な状態」を指すのです。（次号に続く）

「葬儀や法事は何のためにするのですか」①

1. はじめは

「門徒もの知らず」？

浄土真宗の「葬儀」「法事」に

ついては、諸宗派に見受けられるような葬儀や荘厳に比べる  
と、「門徒もの知らず」だから楽  
でよいとするステレオタイプの  
風潮が多く見受けられます。

「門徒もの知らず」の本来の  
意味は「門徒もの忌知らず」で  
あり、死に対する恐れを穢れと  
して忌み嫌う、つまり「蝕穢」  
を忌むことはしないという意味  
です。葬儀で塩を使わず、友引  
でも葬儀をするのは浄土真宗だ  
けです。そもそも、亡くなった  
人を穢れとして扱い、塩で払う  
こと、友引により友が死に追い  
やるのであれば、亡くなった人  
を悪霊にしたてる考えになりま  
す。亡き人に対し、敬う気持ち  
も感謝する思いも皆無であるこ  
とを示しているのが、忌む心で  
す。門徒は亡き人の願いに寄り

為に葬儀を勤めるのです。

ここでは、親鸞聖人の思想をも  
とに浄土真宗の「葬儀」と「法事」  
の在り方を深堀して再考してみ  
たいと思います。

仏事の歴史と「追善供養」

平安時代において、天皇や貴族  
は、吉兆招福の為の祈祷や追善供  
養を密教に担わせました。一方  
で、穢れを忌み嫌い、庶民の遺体  
は河原や野原に遺棄されました。

中世のころの庶民には、葬儀を  
する程の財力はありませんでし  
た。しかし、浄土思想が民衆の心  
を捉えると、中国化された仏教に  
混在した「十王思想」が禅宗を中  
心に地方に広まり、武士や農民に  
至るまで「追善供養」が拡大した  
のです。

そして、庶民によって育まれた  
禅僧たちが、儒学の朱子学の影響  
を受けて位牌を取り入れ、様々な  
儀礼作法を生み、葬儀が根付いて  
いったのです

供養とは、三宝（仏・法・僧）、  
である亡き人（諸仏）に供物を供  
え、私が功德を積んで回向する、  
つまり功德を差し向ける行いを  
指します。

しかし、禅宗の開祖とされる中  
国の達摩大師は、自らを「無功德」  
としています。仏教諸派の開祖で  
さえ「無功德」であるにもかかわらず、  
一般庶民が亡き人に対し、  
功德を差し向けることができる  
のでしょうか？

回向を如来回向、つまり「還相」  
として捉える浄土真宗では、わが  
身と心を供える意味において、声  
明を荘厳し（しつらえ）、私自身  
をこの世に存在させた諸仏に感  
謝し、私自身への如来からの功德  
回向を讃え、仏徳讃嘆すること  
が、私たち凡夫にできる勤めにな  
ります。

天台宗僧侶で仏教学者の多田  
孝正は、「禅僧たちが日本に広め  
た葬儀の方法が仏教の庶民化を  
はかり、一方で浄土教は法名に

よって個人の信仰を保証してい  
た」と述べている通り、浄土真宗は、  
儀礼にこだわることより、その中  
身、つまり信心を得るための仏縁と  
しての葬儀であったとされます。

親鸞は「信心の定まるとき、往生  
またさだまるなり。来迎の儀式をま  
たず」（『末燈鈔』）と儀式より信心  
決定往生を重視しています。（神道  
との違いでもある）

また、「さきだちて滅度にいたり  
候ひぬれば、かならず最初引接のち  
かひをおこして、結縁、眷属朋友を  
みちびくことにてそうろう」と亡き  
人は残した遺族を迷いから救うた  
めに誓いを立て、菩薩となってこの  
娑婆に戻り、真実へ導いてくれると  
「還相」回向を説明しています。

功德回向（供養）は、私たちから  
亡き人への方向にあらず、亡き人か  
ら私たちに向けられたものであり、  
諸仏と成る亡き人に感謝を表現し、  
その声を聴く場が葬儀であり、法事  
と成るのです。（次号に続く）